

## 地域の博物館実務者との意見交換会の概要

### 1 日時

令和7年1月21日（火） 午後1時30分～午後3時00分

### 2 場所

山形県私学会館大会議室

### 3 出席者

出席者名簿のとおり

### 4 会議の概要

- 資料に基づき、県から新博物館基本構想検討委員会における検討状況について説明した。
- 説明を踏まえ、「県内博物館のネットワークの中核として期待される新博物館の役割」、「博物館と学校との連携(博学連携)」及び「博物館のデジタル活用、デジタルアーカイブの取組み」等について、各出席者から御意見をいただいた。

### 【各出席者からの意見】

#### (1) 県内博物館のネットワークの中核として期待される新博物館の役割について

##### ■ 梅澤 美穂 氏（広重美術館）

- ・ 本県を代表する博物館としての役割を果たすため、公開承認施設としての機能を有する企画展示室を備えてほしい。誰にとっても訪れやすいということはもちろん、何度でも訪れたい、持続的な魅力を持つ博物館が期待される。そのためには、質の高い企画展を継続的に開催できる施設の整備が不可欠である。特に、国宝や重要文化財を含む質の高い展覧会を開催することにより、本県の文化振興に寄与するとともに、県内外からの来館者の増加が期待できる。
- ・ 文化財レスキューについて、昨年の新庄での被害を踏まえ、県立博物館が関係機関との調整役を担うことが期待される。災害時には主体的に対応し、地域の博物館からだけでなく、個人からの相談も受け付ける機能を担うことが望ましい。

##### ■ 岡部 信幸 氏（山形美術館）

- ・ 公開承認施設については、山形の文化力・ブランド力をアピールできる。公開承認施設は、博物館同士の資料の貸し借りが容易になる一方、コストは発生し、魅力的な企画展の継続的な開催が求められる。博物館の使命を反映した自主企画のほか、博物館に加えて企画会社や新聞社、マスコミなどとの共同企画という選択肢もあるため、その点も含めて検討してはどうか。
- ・ 県立博物館が災害時の支援要請の取りまとめを担うとともに、被災地域の資料を一時保管する機能を持つことが望ましい。

■ 渋谷 孝雄 氏（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館）

- ・ 公開承認施設については、そうした施設であれば全国の博物館との連携による巡回展の開催にも対応できるようになる。

■ 角屋 由美子 氏（米沢上杉文化振興財団、上杉神社稽照殿）

- ・ 公開承認施設については、館の信頼度向上に繋がるだけでなく、文化庁の補助金を受けることができる。また、国宝や重要文化財を借用した展示を行うことで、魅力度が上がる。一方、公開承認施設でない場合、他館から資料を借用して企画展を行うたびに、消防の点検などの各種事務作業が必要となり、大きな負担が発生する。認証後も5年に1度の手続きは必要だが、事務作業の負担を考慮すれば、公開承認施設となることが望ましく、米沢市上杉博物館では、公開承認施設となったことで事務負担が大きく軽減された。

新博物館が山形県の博物館の中でリーダーシップをとる上で、学芸員の質は重要だが、公開承認施設になることで、学芸員の経験値向上にも寄与すると考える。

■ 田中 章夫 氏（本間美術館）

- ・ 公開承認施設については、県民の誇りにつながる施設となることが期待される。
- ・ 学芸員がスキルアップすることで他館に指導できるような中核的な施設となることが望ましい。
- ・ 文化財レスキューに関して、東北芸術工科大学や山形大学、全国組織との連携を強化し、情報が適切に共有されるようにする。普段から文化財の所在を把握し、災害時に優先的に保護すべき資料を特定するルールを策定することが望ましい。市町村とも連携する必要があるが、その際にも博物館が中心になることを期待する。

■ 本間 豊 氏（致道博物館）

- ・ この10年間で状況が大きく変化し、一般家庭や団体が文化財を保存できず、引き受け先を求める相談が増加している。公開承認施設となることで、県博が重要な文化財を十分に扱えることをアピールできるようになり、文化財の県外流出を防ぐ防波堤の役割を果たすことができる。

■ 伊藤 洋一 氏（新庄ふるさと歴史センター）（書面、県読上げ）

- ・ 新庄ふるさと歴史センターでは、令和6年7月25日の大雨で地下の設備と収蔵品約3,000点が浸水。山形文化遺産防災ネットワークなどの支援を受け、8月～11月に文化財レスキューを実施。現在は仮設電源で一部館内の公開を再開している。
- ・ 県立博物館が、県内の博物館が被災した際、県や専門機関と連携し、応急対応のための助言や人的支援の窓口となることが望ましい。
- ・ 大規模災害時以外でも、資料の保存や修復に関する専門職からの助言機能を県立博物館に持ってもらえれば、小規模館や学芸員を配置していない館にとって有益な支援となる。

## (2) 博物館と学校との連携（博学連携）について

### ■ 岡部 信幸 氏（山形美術館）

- ・ 山形美術館では、大学との連携に取り組み、企画展を中心に教育普及活動を実施している。東北芸術工科大学の総合美術コースの学生と連携し、小中学生を対象に企画展に合わせたアート作品を制作するワークショップを行い、企画展開催中に展示する取組みを行っている。また、子ども向けの鑑賞用ワークシートの作成にも取り組んでいる。山形大学とも連携し、毎年ではないが、造形コースの大学院生が文化コーディネーター実習として企画展の補助や教育普及活動に携わっている。
- ・ 過去に県の補助金を活用し、学芸員が文化庁のエducator研修を受講し、対話型鑑賞のプログラムを作成した。そのプログラムを小学校の校長会を通じて周知し、学校の来館を促進した。現在も対話型鑑賞の取組みは継続しているが、実際に来館する小学校は、近隣校や担当教員の関心が高い学校に限られる。

### ■ 渋谷 孝雄 氏（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館）

- ・ 当館に小学生が来館する理由は、原始、古代、中世の学習が中心である。学校の授業の進行に合わせ、毎年6月以降に見学の要望がある。これまで、高畠町を中心とした置賜地域の小学校から来館が多かったが、コロナ禍では庄内からの来館が急増し、来館者の半数を占める状況となった。コロナ収束後は、庄内からの来館は激減している。
- ・ 当館では、学校の先生と連携し、事前に学習内容をヒアリングし、それに基づいて展示の鑑賞や弓矢、火起こし体験を提供している。来館した学校の学区内にある遺跡を解説したマップを作成し、説明を行うと、子どもたちの目の色が変わる。ほとんどの学校の学区内に遺跡が存在する。実際には子どもたちや先生が見たことがない場合が多いが、身近に感じると興味を持ちやすい。教科書に載っているもの、展示室に展示されているもの、そして自分たちの学区にあるものを比較することで、学習効果が高まっていると感じている。

### ■ 角屋 由美子 氏（米沢上杉文化振興財団、上杉神社稽照殿）

- ・ 上杉博物館は、幼稚園児など若い年齢から楽しめる体験学習室を設置しているほか、米沢女子短期大学の史学実習の受入れを行っている。
- ・ 小中学校の見学に際しては、事前に担当の先生と学芸員が協議し、「何を求められているか」を確認したうえで対応している。一方、学芸員の負担が大きいため、専門の学芸員の配置について検討が必要。配置しない場合でも学芸員への配慮が求められる。
- ・ 置賜地域全体を対象に、館に来られない学校に対して出前授業を実施している。
- ・ 以前、小中学校の入館者を増やすため、各学校に説明に回ったことがあったが、「ミュージアムバスを出してほしい」という要望が多かった。バスの実現が難しいため、その後はあまり積極的に訪問していない現状もある。

### ■ 田中 章夫 氏（本間美術館）

- ・ 本間美術館は博学連携が難しい状況にあるが、少子化が進む中で、子どもたちに地域を知ってもらい、誇りを持ってもらうために、身近な文化財に触れることが重要であると感じている。

- ・ ミュージアムプログラムを作成しても、最初は物珍しさから学校から来館があるが、継続的な来館につながりにくい。先生が変わると、美術館での取組みが伝わらない。学校に子ども向けの企画展を案内しても、学校のスケジュールが既に固まっており、美術館の展示スケジュールと合わないことが多い。
- ・ 山形県立博物館は 30 万点を超える資料を所有しており、それを活用して若い世代に山形の良さや文化力を伝えることが求められる。それに当たり、時代の要請を踏まえ、デジタルアーカイブを活用した授業や、インターネットによるオンライン授業など、新たな方法も有効である。
- ・ 県内のどの館でも学芸員が少なく、自館の展示や調査・資料保存に多くの時間を割かなければならず、教育普及活動が十分とは言えない。そのため、新しい県立博物館には教育普及のための専門職を配置するべきである。学芸員が専門職として長く務められるような処遇についても検討が必要である。

#### ■ 本間 豊 氏（致道博物館）

- ・ 庄内初の中高一貫校である致道館高校が今年度開校し、高校生の受入れを行っている。3 日間の日程で、博物館の活動内容や学芸員の仕事内容について講義形式で実施している。この取組みは 2～3 年前に鶴岡市の教育委員会からの要請を受けて開始し、年間で 10 数人程度の応募者を受け入れている。受け入れ人数は少ないが、博物館に興味を持つ高校生がいることは明るい展望だと感じている。
- ・ 小学校との連携では、郷土学習の一環として、鶴岡市内の全小学校と三川町の小学校が必ず博物館を訪れる。1 時間程度で、学芸員が施設や昔の暮らしなどについて、できるだけ子どもの目線に合わせ、説明内容を易しくし、楽しんで帰ってもらうことを重視して対応している。それが、将来的に「もう一度来てみたい」と思わせ、地域の歴史に若い人たちが興味を持つきっかけになることを目指している。

### (3) 博物館のデジタル活用、デジタルアーカイブの取組みについて

#### ■ 梅澤 美穂 氏（広重美術館）

- ・ 広重美術館は民間運営で、コロナの影響で 2021 年 4 月から 3 年間休館していた。その際、TOPPAN の先端技術の方々と出会い、「MiraVerse®ミュージアム」という VR 美術館を製作した。現在、本館と新館の 2 館を公開しており、パソコンと VR ゴーグルがあれば、世界中から 24 時間、デジタルアーカイブされた資料を仮想空間で可視化できる。この 3 年間で技術が進化し、生成 AI を使って 1 枚の絵の中に入ることができるゲーム性のあるコンテンツ提供も可能となった。現段階では入館料は取っていないが、将来的には収益化の仕組みを作りたい。
- ・ 新しい博物館の機能としてデジタルの活用は必須であると思うが、展示として見せるデジタルコンテンツは、10 年後 20 年後には時代を感じさせるものになる可能性がある。どのようなデジタル技術を採用するのかの見極めが難しい。また、採用後も継続的に更新する予算と手間を確保していかないと魅力には繋がらない。
- ・ 必要性の高い収蔵品からデジタル化を進めることが重要であり、山形県立博物館の 30 万点の資料も、早い段階からデジタルアーカイブへ取り組むべきである。

- ・ 国内外の文化財アーカイブを利用しており、博物館の職員だけでなく、学生や様々な職種の人々も情報を気軽に得られる環境が浸透してきている。国が進めているジャパンサーチなどのプラットフォームに連携して、いつでも閲覧できる環境を整え、デジタルコンテンツをどう活用し見せていくかを検討する必要がある。

#### ■ 岡部 信幸 氏（山形美術館）

- ・ 山形美術館ではようやく本の形で収蔵品リストが完成したが、デジタル化にはまだ進んでおらず、どのような形で画像を含めたデータを公開していくかについて方針が定まっていない。
- ・ 全国の博物館が共通して使えるフォーマットは未だ不十分な段階である。国でデータベースが整備されているが、画像がない資料が多いケースや、日本美術に関しては点数が少ないなどの課題がある。
- ・ 県立博物館にも資料を検索できるサイトがあるため、そこから移行する方法も考えられる。デジタルアーカイブは、いつでも誰でもどこからでも気軽に閲覧できることが重要であり、その上で実際に来館して実物を見ることにつながるのが取組みの方向性として良いのではないか。

#### ■ 角屋 由美子 氏（米沢上杉文化振興財団、上杉神社稽照殿）

- ・ 20年以上前からデジタルの活用が求められており、情報提供だけでなく、来館者が自分で探すような体験型、参加型の常設展示室を求めている。魅力的な映像や画像を利用することは必須であり、その考え方は現在も変わらない。最近「画像が高画質でないのが残念だ」との声が多くなっている。建設時に更新が必要であることは最初から分かっていたが、予算確保が難しく、米沢市の総合計画に載せてもらうなど地道な取組みをしている。
- ・ デジタルアーカイブについては、学芸部門の調査研究の進展に伴い、少しずつ公開を進めている。市立図書館が古文書等を多く所有しており、上杉家の古文書が点在しているため、図書館と博物館の総合アーカイブをホームページで公開している。
- ・ 国宝ではない上杉文書は十分に活用されていなかったが、4年前から文化庁の調査事業費を使い、1万点近くの詳細な目録を作成しており、来年度に完成予定。これを全てデータベース化して公開することを進めている。

#### （4）その他

##### ■ 岡部 信幸 氏（山形美術館）

- ・ 地域に根差し、博物館のネットワーク形成支援の中心となってほしい。博物館だけでなく、学校、他の文化施設、自治体、民間企業、地域住民が博物館を中心に結びつく形を目指すべきである。特に地域住民が気軽に参画できる体制づくりが重要である。

##### ■ 渋谷 孝雄 氏（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館）

- ・ 学芸員が1分野1人は寂しい。学芸員を増やすことで予算はかかるが、科研費を得た研究を進めることもできる博物館になることを期待したい。科研費を得た研究ができて例として、北日本では北海道博物館や東北歴史博物館がある。

- ・ 博物館の敷居を低くし、体験や講座で学べるような、県民が気軽に訪れることができる施設となってほしい。
- ・ 事業費シミュレーションでも検討されているが、分散型の整備を十分に検討すべき。当館のように最寄り駅からタクシーで 3~4,000 円かかるようなところには人は来づらい。展示については、やはり駅から近いなど、交通の便のよい都市部に置くべきであり、収蔵庫は別の場所でも構わない。敷地面積等を踏まえて検討すべき。

■ 角屋 由美子 氏（米沢上杉文化振興財団、上杉神社稽照殿）

- ・ 上杉博物館は 24 年前に建てられた施設で、バリアフリーは完全ではない。障がい者の受入れについては、手話ができる学芸員がいないため、筆談等で対応している。

■ 田中 章夫 氏（本間美術館）

- ・ 自然と人文の 7 分野からなる総合博物館だが、美術工芸も分野として加えてほしい。
- ・ 県立の美術館がない中、地域的な隔たりもあり、県民が公平に楽しめる立地はどこか、また、1 館だけで良いのかについても併せて検討してほしい。

以上